

漢語の語尾声についての一考察—台日韓中四言語の比較

郭敏俊

漢語の語尾声は、母音の以外に入声と鼻音の2種類がある。入声とは、すなわち語尾声に子音の/h/ /p/ /t/ /k/などで収まるものであり、/p/語尾声は「閉唇声 (bilabial stop)」の1つである。鼻音とは、語尾声に子音の/n/ /ŋ/ /m/などで収まるものであり、その内、/m/語尾声は「閉唇声」の1つである。漢語の語尾声はあわせて7種類ある。

日本と韓国両国は、共に中国文化の大きな影響を受けたため、漢語が自国の文化に深く浸透し、ついに自国の文化の骨となり肉となってしまった。日韓両国は、今日に至るまで昔の漢語をそのままに話しているが、漢字の発源地としての中国を振り返ると、現在、広く使われる北京語の発音は古漢語とはかなり異なっている。中国には、唐・宋以降、国力衰弱のため、異民族の侵略と統治によって言葉の発音に影響を受けている。漢語の特徴としての「入声」と「閉唇声」などの語尾声はほとんどなくなったのである。

「入声」とは辞典で「音短促、急収蔵」と解釈している。くわしく言えば、語尾声には「発音が短く急に収まり、発音器官の最後の位置は、合唇で収まるものと、舌先が上顎に当たって収まるものと、口が開くまま舌先が下歯に当たって喉から無気声で収まるものと、これと同じ方法で喉から短急な有気声を出すものとの4つの入声がある。

元来、日本語には「入声」の要素が存在しておらず、すべての言葉の語尾声は必ず母音で収まるので、入声の付く漢字を発音する場合、一律、母音を付けて発音する。ただし「入声」の類似した日本語の「促音」は、一部分の漢字入声が表現できる。たとえば、配達 (hai tatsu) — 達成 (tat sei) の「達」が語尾声ではない場合、その発音はすなわち入声そのものである。

この点から見ると、日本語にはやはり「入声」の要素がある。ウィキペディア

(Wikipedia) によると、促音に類似した音素・音結合はイタリア語等の欧州地域の一部、および韓国語、広東語、閩南語 (福建) 語、台湾語、ベトナム語などの古代中国語の声調の一つである「入声」を保存している東アジア地域に分布していると記載されている。

次に「閉唇声」について説明しよう。日本語と中国語 (北京語を指す) の語尾声には、両者とも「閉唇声」がついていない。中国語には/n/ (alveolar nasal) と/ŋ/ (velar nasal) の語尾声があるが、/m/ (bilabial nasal) の語尾声がない。日本語には/m/の語尾声がほとんどない上、/n/と/ŋ/の語尾声ははっきりとは区別し難い。それで、漢語の鼻音語尾声の/n/と/ŋ/と/m/については、日本語では全部 n 音で収まってしまう。

韓国語では、漢語の語尾声の入声と鼻音がまだ維持されているが、入声のうちに t 入声が l (r) に訛って長音化した。その上、韓国語の連音現象も一部分の漢語入声を潰し、前字語尾の入声を引いて次字の頭母音と結合して発音する。例を挙げてみると、錯誤 (chak o → cha ko)、石油 (sok yu → so kyu)、卒業 (chot op → choŋ op → cho lop, tが l に訛化) などがある。こうした場合、漢語の単音節の特徴—すなわち字を一つ一つ分けてはっきり発音すること—がぜんぜんなくなり、特に入声の「音短促、急収蔵」の語感

が乏しい。この現象も鼻音に発生し、たとえば軍人 (kun in → ku nin)、音楽 (irm ak → ir mak)、金曜日 (kirm yo il → kir myo il) など枚挙にいとまがない。

上述のように、日本語と韓国語がおのおのの言語の特性で、完全に漢語の語尾声の精粋を把握できないのは、むしろあたりまえのことであろう。概して、日本語と韓国語のなかには、まだたくさんの古漢語の音がそのまま維持されている。逆に、現在の中国語は唯漢語の語尾声がなくなったばかりではなく、その発音も元の音とはかなり違っている。この点から見ると、古漢語を理解するのは、先ず日韓両国の言語を理解しなければならない。もし李白が今再び長安を訪れることができたなら、そこを他国か異郷だと感じるかもしれない。しかし、もし李白が日本か韓国を訪れたら、現在の中国語よりも単語をもっと理解できるかも知れないのだ。

もし李白が台湾を訪れたら、これこそ里帰りであると感じるに違いない。なぜかといえば、台湾語には、今日に至るまで古漢語の発音がそのまま保存されているからである。漢語の語尾声の入声と鼻音が完璧に付いている以外にも鼻音が/n/と/ŋ/と/nn/の3種類がある。台湾語は漢語史の博物館とも漢語の活化石とも言われている。台湾語の源流を溯ると、紀元前16世紀から11世紀の遠古の商朝までに達する。先民は中原のあちこち移り廻って、各地の方言を多少受け入れて、時代の移りに随って北から南へと進んで、最後に台湾に到着した。台湾語には魏晋時代の呉音と唐代の漢音とそれ以来の唐音などが幅広く残されている。特に唐代の科挙制度の影響で、当時の長安音は初めに読書の実用性から学ばれ、ついに一般生活に至って日常用語になってしまった。また台湾語には文言と口語がある。たとえば、「白」birt (文言) beh (口語)、「一」it (文言) chit (口語)、「十」sip (文言) tsap (口語) などである。そのほか台湾語には韓国語と日本語との発音がほぼ同じの漢語が少なくない。たとえば、世界・信用・健康・鉛筆・人気・先生・国家・新婦・新年・意見・離別・義務・仁愛・民族・列車・軍人・大君などなどである。

今日の台湾語にはたくさんの日本語が残って台湾語の成分の一部となった。もちろん、国民政府の統治によって北京語を国語として全民教育を施した結果、北京語も台湾語の成分の一部となった。にもかかわらず、台湾語は古漢語を発音できる点から見ると、人類文化の遺産として韓国語と日本語と同じように古漢語を研究するに欠くべからず重要な言語の一つとも言えよう。

次に、表1で台湾語を主として韓国語と日本語と北京語との漢字の語尾声の同異を比較してみよう。

表1 中日韓台四ヶ言語の漢音比較表

	語尾声	漢字	台湾語	韓国語	日本語	中国語	関連字例 (日本語音読み)			
入	-p (閉唇声)	圧合	ap hap	ap hap	at-u go-o	ya her	答とう 峽きょう	業ぎょう 協とう	十じゅう 急きゅう	葉よう 涉しょう
	-t	八直悦	pat tit wat	phal chik yol	hat-i jik-i et-u	pa tsu ye	一いち 匹ひき 末まつ	質しち 力りき 薩さつ	七しち 式しき 説せつ	日にち 笛てき 達たつ

声	-k	六積 lak chirk	lul kyok	lok-u seki	liou chi	北ほく 席せき	訳やく 籍せき	育いく 識しき	目もく 色しき
	-h	塔雪石 thah seh cioh	thap sol sok	tho-o set-u sek-i	tha shyue shy	郭かく 節せつ 赤せき	客きゃく 雪せつ 滴てき	作さく 月げつ 戚せき	格かく 活かつ 積せき
鼻	-nn	精晶飴 gann cinn ann	chhoŋ chhoŋ ham	se-e sho-o an	yia ciŋ shian	清せい 賞しょう 羹かん	声せい 象ぞう 酸さん	星せい 横おう 銭せん	嬰せい 争そう 官かん
	-n	天安 then an	chon an	then an	then An	山さん 建けん	単たん 般はん	勘かん 現げん	線せん 前ぜん
音	-ŋ	空迎 khoŋ giŋ	khoŋ yoŋ	ku-o ge-e	khoŋ yiŋ	光こう 英えい	望ぼう 亭てい	王おう 程てい	港こう 省せい
	-m (閉唇 声)	金陰 kim im	kim wm	kin in	jin in	心しん 談だん	暗あん 沈ちん	音おん 林りん	男なん 念ねん

注：1 ローマ字綴りは、必ずしも当該国の標準字ではない。発音に当てるためである。
 2 日本語のカ、タ、パなどの行について、気声と無気声の二種類の発音があるから、
 気声の場合、小さい **h** を付けて示す。

上述の表 1 から 4 カ国言語の相違点をまとめたものが表 2 である。

表 2 台湾語・韓国語・日本語・中国語の相違点

	語尾声	台湾語	韓国語	日本語	中国語
入	-p (閉唇 声)	p	p	o	---
	-t	t	l k	chi ki tsu	---
声	-k	k	k l	ku ki	---
	-h	h	p l k	o tsu ki	---
鼻	-nn	nn	ŋ m	e o n	a ŋ n
	-n	n	n	n	n
音	-ŋ	ŋ	ŋ	o e	ŋ
	-m (閉唇 声)	m	m	n	n

先ず入声について比べて見よう。① 中国語の入声がほとんどなくなって全部母音化した。② -p 語尾声の場合、韓国語には-p が付いているが、日本語では-p が母音の o に変わり、長音化になった。③ -t 語尾声の場合、韓国語には-t が k なく、l に変化した。日本語には漢字に応じて chi か ki あるいは tsu に変わった。④ -k 語尾声の場合、韓国語には k をそのまま維持するか、l に訛った例もある。日本語では ku ないし ki に変化した。⑤ -h 語尾声の場合、韓国語には-h がないが、その代わり漢字に応じて p か l あるいは k に変わった。

次に鼻音について比べて見よう。① -nn 語尾声の場合、韓国語では η ないし m に変わった。日本語には漢字に応じて e か o か n に変化した。中国語では a 母音か η か n に変わった。② -n 語尾声の場合、四言語全てで維持されている。この点が唯一の共通点である。③ -ŋ 語尾声の場合、台湾語と韓国語と中国語にはみんな η が付いているが、日本語では o あるいは e の長音化となった。④ -m 語尾声の場合、韓国語は台湾語と同じく m が付いているが、日本語と中国語は共に n に変わった。

以上は、単に私個人の考察でまとめたものであり、専門的文献を特に参考としていないので、論点が必ずしも専門家の意見とは一致しないかも知れないが、もし参考になるところがあれば幸甚である。

作者註：本文發表於「北加州日本語教師協會」2009 年會刊